

日本付近のおもな被害地震年代表

有史以来のおもな被害地震を選んだ。年月日、震央の位置, M_I 相当のマグニチュード (記号 M), 地域は, 1884 年までは『日本被害地震総覧』(599–2012, 宇佐美ほか, 2013) と『地震活動総説』(宇津, 1999), 1885 年から 1918 年までは『地震の事典』(第 2 版の「日本の主な地震の表」, 茅野・宇津, 2001) に基づき, 他の研究成果も取り入れた。1919 年以降は気象庁が月報などで公開した値である。年月日は最初に西暦 (常にグレゴリオ暦), () 内に日本暦を示した。

地域は 1884 年まではおもに被災地を表し, 1885 年以降は震央地名 (1919 年以降は気象庁の地震情報の区分) を表す。*印は当時の気象庁震央地名, [] などの数字は宇津の被害等級である。被害摘要は旧版被害地震年代表や『日本被害地震総覧』, 『地震活動総説』, 『地震の事典』, 消防庁災害情報などをもとに記述した。1996 年以降の震度は計測震度。関連死については() 内に記した。全壊, 半壊などは棟数を表す。1872 年以前の記事に現れる日付は日本暦に対応する。記事の最後の[] 内は今村・飯田による津波規模である。被害情報は原則, 5 年経過で確定とする。

平成 17 年版より地震の選択基準を原則「死者 1 名以上または家屋等の全壊 (潰) 1 以上または津波規模 1 以上」とし 1885 年まで遡って適用した。また, 平成 23 年版よりグローバル CMT プロジェクトによるモーメントマグニチュードを記号 M_w とともに併記した。ただし, *印は防災科研や文献の値。遠地津波の項にある記号 M_s は震源の表面波マグニチュード。被害等級, 津波規模, 各種マグニチュードについては地震関係公式諸表を参照。名称はおもに『地震学』(第 3 版, 宇津, 2001) に従ったが, 誤った元号を含むときはそれを日本暦に〈〉付きで追記した。1960 年以降は気象庁命名のものから年などを除いたもの。

番 号	西暦(日本暦) 緯度 経度 M=マグニチュード／地域：(名称：)被害摘要
1	416 8 23 (允恭天皇 5 7 14) 遠飛鳥宮付近 (大和) :『允恭天皇の大和河内地震』:「日本書紀」に「地震」とあるのみ, 被害の記述はないが, わが国の歴史に現れた最初の地震, 疑わしきか?
2	599 5 28 (推古天皇 7 4 27) 大和 : 倒潰家屋を生じた。「日本書紀」にあり, 地震による被害の記述としてはわが国最古のもの。被害の範囲が不明で M は推定できない。
3	679 1/2 - (天武天皇 7 12 -) $M_{6.5} \sim 7.5$ 筑紫 : 家屋の倒潰が多く, 幅 2 丈, 長さ 3 千余丈の地割れを生じた。
4	684 11 29 (天武天皇 13 10 14) $M \approx 8 \frac{1}{4}$ 土佐その他南海・東海・西海地方 :『天武天皇(白鳳)の南海・東海地震』: 山崩れ, 河湧き, 家屋社寺の倒潰, 人畜の死傷多し, 津波来襲して土佐の船多数沈没。土佐で田苑 50 余万頃 (約 12 km ²) 沈下して海となつた。南海トラフ沿いの巨大地震と考えられる。[3]
5	701 5 12 (大宝 1 3 26) 丹波 : 地震うこと 3 日。被害が不明なので M も不明。藤原京では感じなかつたらしい。若狭湾内の凡海郷が海に没したという「冠島伝説」は否定されている。